

はじめに

本書は、主として大学で初めて政治思想（政治哲学）を学ぼうとする人に向けて書かれた、西洋および日本の政治思想通史である。

政治というものを辞書的に定義するならば、社会内の意見や利害の対立を調整し、安定と秩序をもたらす作用ということになるだろう。そのような営みは、おそらく人類の歴史とともに古い。人間は複数で存在する限り、政治を必要とするからだ。しかし、ポリティクスという言葉が古代ギリシアの都市国家ポリスに由来するように、あるいはデモクラシーの語源がギリシア語のデーモス（民衆）とクラティア（権力）にあるように、政治という活動を自覚的に認識し、実践したのは、古代ギリシア人が最初であった。

そうした自覚的な問い直しを通して、政治に関する様々な語彙が生まれ、政治を語る文法が整えられていく。政治思想（政治哲学）の始まりである。古代ギリシア以来、優れた思想家は優れた思想史家でもあって、自らが生きる時代の問題を、常に過去の思想家の言葉を手がかりに考え、その思索を言葉として残してきた。本書の【西洋編】は、このように積み上げられてきた西洋政治思想2500年の歴史を3部構成の下に描き出す。第Ⅰ部は古代ギリシアから中世まで、第Ⅱ部はルネサンスから19世紀末まで、第Ⅲ部は20世紀以降を扱っている。そこには、混迷を深める現代社会にとって有益な示唆が見出されるに違いない。と同時に、扱い方によっては道を誤らせる危険な発想も含まれているかもしれない。あらゆる意味で政治思想史を学ぶ意義は大きいといわなければならない。

【日本編】は、幕末から1945年の敗戦までを扱う第Ⅰ部と、敗戦から1990年代までを扱う第Ⅱ部の2部構成である。【西洋編】と比べると取り上げる期間が約150年と非常に短い。この間に西洋政治思想が日本政治思想に与えた影響は計り知れない。とはいえ、長い時間をかけて形作られてきた西洋政治思想が、短期間に、しかも怒濤のように受容されたことで、それらの本質を十分に理解するだけの時間的余裕がなかったり、場合によっては誤解に基づく反発を

生み出したりしたのも事実である。その意味で、日本政治思想の歴史を振り返ることは、異なる背景の下で形成された思想を理解することの難しさを痛感すると同時に、それでもその努力を決して諦めてはならないということを再確認する契機ともなるだろう。

本書の特徴の一つは、ご覧のように、一冊で西洋と日本の政治思想史を学べる点にある。近現代日本の政治思想史は、良かれ悪しかれ西洋政治思想の受容史という一面を持っているので、前者を理解するには後者についての知識が不可欠である（本書の【日本編】で西洋の思想家に言及する場合、【西洋編】の関連する章を示しているので適宜活用してほしい）。逆に、日本で西洋政治思想史を学ぶということは、「自由」「平等」「社会」「民主主義」といった、明治期以来の翻訳語を通して考えることを意味しており、西洋の知と格闘した先人たちの努力に対して無関心ではいられまい。いずれにせよ、日本とは異なる社会的土壌から生み出された政治概念を自家薬籠中のものとするには、西洋政治思想史と日本政治思想史の両面への目配りが必要とされる。

執筆にあたっては、平易でオーソドックスな叙述を旨とした。限られた紙数のなかで十分に紹介できなかった思想家や学説も少なくないし、専門家からみれば単純化の誹りを免れない記述もあるかもしれない。ウイトゲンシュタインにならっていえば（この天才言語学者についても残念ながら言及できなかったが）、本書は登りきった後に投げ捨てる梯子にすぎないのであって、もっと深く政治思想を学んでみたいと思った人は、巻末の参考文献に挙げられた研究書に挑戦してほしい。そこからさらに豊穡な政治思想の世界が開けてくるだろう。われわれ執筆者も、これらの先行研究から多大な学恩を受けており、今回も改めて数多くのことを教えられた。

なお、本書において西洋の思想家から引用する場合、原文を参照したうえで既存の翻訳を改変している箇所があるが、もっぱら地の文との兼ね合いを考慮してのことである。日本の西洋政治思想史研究が、膨大な翻訳の蓄積によって支えられていることはいうまでもない。

こうして本書が完成するまでには、法律文化社の舟木和久氏と八木達也氏に一方ならぬお世話になった。最初に舟木氏に本企画をご提案いただいてから、

はじめに

もう何年もの月日が流れてしまった。その後、企画を引き継いでくださった八木氏にも、作業の遅延でご迷惑をおかけしたうえに、煩瑣な編集作業でお手を煩わせた。お二人のご尽力なしには、本書は日の目をみなかったであろう。ここに記して心からの感謝を申し上げたい。

2023年12月

執筆者一同